

薤露行

夏目漱石

青空文庫

世に伝うるマロリーの『アーサー物語』は簡淨素樸そぼくという点において珍重すべき書物ではあるが古代のものだから一部の小説として見ると散漫そしりの譏そしりは免がれぬ。まして材をその一局部に取つて纏まとつたものを書こうとすると到底万事原著による訳には行かぬ。従つてこの篇の如きも作者の随意に事実を前後したり、場合を創造したり、性格を書き直したりしてかなり小説に近いものに改めてもうた。主意はこんな事が面白いから書いて見ようというので、マロリーが面白いからマロリーを紹介しようというのではない。そのつもりで読まれん事を希望する。

実をいうとマロリーの写したランロットは或る点において車

夫の如く、ギニヴィアは車夫の情婦のような感じがある。この一点だけでも書き直す必要は充分あると思う。テニソンの『アイジルス』は優麗都雅の点において古今の雄篇たるのみならず性格の描写においても十九世紀の人間を古代の舞台に躍おどらせるようなかきぶりであるから、かかる短篇を草するには大おおに参考すべき長詩であるはいうまでもない。元来なら記憶を新たにまねするため一応読み返すはずであるが、読むと冥々のうちに真似まねがしたくなるからやめた。

一 夢

百、二百、むら簇がる騎士は数をつくして北かたの方なる試合へと急げ
 ば、石いしに古ふるりたるカメロットやかたの館には、ただ王妃ギニヴィアの長
 く牽ひく衣ころもの裾すその響ひびきのみ残る。
うすくれない
 薄 紅こうの一枚をむぎとばかりに肩より投げ懸けて、白き二の
 腕うでさえ明らさまなるに、裳もすそのみは軽かるく捌さばく珠たまの履くつをつつみて、な
 お余りあるを後ろうしろざまに石階いしがはしの二級に垂れて登る。登り詰とめたる
 階いしがはしの正面には大いなる花を鈍にびいろ色の奥に織り込とめる戸帳とばりが、人な
 きをかこち顔なる様にてそよとも動かぬ。ギニヴィアは幕の前に
 耳押し付けて一重向うに何事をか聴きく。聴きおわりたる横顔をま
 た真まむこう向かに反かえて石段の下を鋭とどき眼うかがにて窺うかがう。濃こまやかに斑ふを
 流ながしたる大理石の上は、ここかしこに白はき薔薇ばらが暗くきを洩もれて和やわら

かき香かおりを放つ。君見よと宵よいに贈れる花輪のいつ摧くだけたる名残なごりか。しばらくはわが足に纏まつわる絹の音にさえ心置ける人の、何の思案か、屹きと立ち直りて、織ほそき手の動くと見れば、深き幕の波を描いて、眩まばゆき光り矢の如く向い側なる室しつの中よりギニヴィアの頭かしらに戴いたける冠を照らす。輝けるは眉間みけんに中る金剛石ぞ。

「ランスロット」と幕押し分けたるままにいていう。天を憚はばかり、地を憚はばかる中に、身も世も入いらぬまで力の籠こもりたる声である。恋に敵なければ、わが戴おける冠を畏おそれず。

「ギニヴィア！」と応こたえたるは室の中なる人の声とも思われぬほど優しい。広き額を半うづば埋めてまた捲まき返る髪かみの、黒きを誇るばかり乱れたるに、頬ほおの色は釣つり合あわず蒼あお白しろい。

女は幕をひく手をつと放して内に入る。裂目を洩れて斜めに大理石の階段を横切りたる日の光は、一度に消えて、薄暗がりの中に戸帳の模様のみ際立ちて見える。左右に開く廻廊には円柱の影の重なりて落ちかかれども、影なれば音もせず。生きたるは室の中なる二人のみと思わる。

「北の方なる試合にも参り合せず。乱れたるは額にかかる髪のみならず」と女は心ありげに問う。晴れかかりたる眉に晴れがたき雲の蟠まりて、弱き笑の強いて憂の裏より洩れ来る。

「贈りまつれる薔薇の香に酔いて」とのみにて男は高き窓より表の方を見やる。折からの五月である。館を繞りて緩く逝く江に千本の柳が明かに影を、して、空に崩るる雲の峰さえ水の底に流れ

込む。動くとも見えぬ白帆に、人あらば節面白き舟歌も興がろう。河を隔てて木の間隠れに白くく筋の、一縷の糸となつて烟に入るは、立ち上る朝日影に蹄の塵を揚げて、けさアーサーが円卓の騎士と共に北の方へと飛ばせたる本道である。

「うれしきものに罪を思えば、罪長かれと祈る憂き身ぞ。君一人館に残る今日を忍びて、今日のみの縁とならばうからまし」と女は安らかぬ心のほどを口元に見せて、珊瑚の唇をぴりぴりと動かす。

「今日のみの縁とは？ 墓に堰かるるあの世までも渝らじ」と男は黒き瞳を返して女の顔を昵と見る。

「さればこそ」と女は右の手を高く挙げて広げたる掌を豎にラン

スロットに向ける。手頸てくびを纏まとう黄金こがねの腕輪がきらりと輝くときラ
ンスロットの瞳はわれ知らず動いた。「さればこそ！」と女は繰
り返す。「薔薇の香かに酔える病を、病と許せるは我ら二人のみ。
このカメロットに集まる騎士は、五本の指を五十度繰り返えすと
も数えがたきに、一人として北に行かぬランスロットの病を疑わ
ぬはなし。束つかの間に危むさうきを貪ぼりて、長き逢おう瀬せの淵ふちと変らば：
…」といいながら挙げたる手をはたと落す。かの腕輪は再びきら
めいて、玉と玉と撃てる音か、戛かつぜん然と瞬時の響きを起す。
「命は長き賜物ぞ、恋は命よりも長き賜物ぞ。心安かれ」と男は
さすがに大胆である。

女は両手を延ばして、戴ける冠を左右より抑えて「この冠よ、

この冠よ。わが額の焼ける事は」という。願う事の叶わばこの黄金、この珠玉たまの飾りを脱いで窓より下に投げ付けて見ばやといえる様さまである。白き腕かいなのすらりと絹をすべりて、抑えたる冠の光りの下には、渦を巻く髪なびの毛の、珠の輪には抑えがたくて、頬のあたりに靡なびきつつ洩れかかる。肩にあつまる薄紅の衣の袖そでは、胸を過ぎてより豊かなる襞ひだを描がいて、裾は強けれども剛かたからざる線を三筋ほど床ゆかの上まで引く。ランスロットはただ窵ようちよう窵ようちようとして眺めてゐる。前後を截断せつだんして、過去未来を失念したる間にただギニヴィアの形のみがありありと見える。

機微ふかの邃ふかきを照らす鏡は、女の有もてる凡すべてのうちにて、尤もつとも明かなるものという。苦しきに堪えかねて、われとわが頭かしらを抑えた

るギニヴィアを打ち守る人の心は、飛ぶ鳥の影の疾ときが如くに女の胸にひらめき渡る。苦しみは払い落す蜘蛛くもの巣と消えて剩あますは嬉うれしき人の情なさけばかりである。「かくてあらば」と女は危ひまうき間に際すどく擦り込む石火の楽とこしみを、長つえに続つづけかすと念じて両頬えみしたたに笑を滴たらす。

「かくてあらん」と男は始めより思い極めた態である。

「されど」と少時しばしして女はまた口を開く。「かくてあらんため——北の方なる試合に行き給え。けさ立てる人々の蹄あとの痕あとを追い懸かけて病癒いえぬと申し給え。この頃の蔭かげぐち口、二人をつつむ疑うたがいの雲を晴し給え」

「さほどに人が怖こわくて恋がなるか」と男は乱るる髪を広き額あたまに払

つて、わぎとながらからからと笑う。高き室しつの静かなる中に、常ならず快からぬ響が伝わる。笑えるははたとやめて「この帳とばりの風なきに動くそうな」と室の入口まで歩を移してことさらに厚き幕を揺り動かして見る。あやしき響は収まって寂じやくまく寞もくの故もとに帰る。「宵見よべし夢の——夢の中なる響の名残か」と女の顔には忽ち紅落ちて、冠の星はきらきらと震う。男も何事か心躁さわぐ様にて、ゆうべ見しという夢を、女に物語らする。

「薔薇咲く日なり。白き薔薇と、赤き薔薇と、黄なる薔薇の間に臥ふしたるは君とわれのみ。楽しき日は落ちて、楽しき夕幕の薄明りの、尽くる限りはあらじと思う。その時に戴けるはこの冠かぶなり」と指を挙げて眉間をさす。冠の底を二重にめぐる一疋びきの蛇へびは黄金こがね

の鱗うろこを細かに身に刻んで、擡もたげたる頭かしらには青玉せいぎよくの眼がんを嵌はめてある。

「わが冠の肉に喰くい入るばかり焼けて、頭の上に衣きぬす擦る如き音を聞くととき、この黄金の蛇はわが髪を繞めぐりて動き出す。頭は君の方かたへ、尾はわが胸のあたりに。波の如くに延びるよと見る間まに、君とわれは腥なまぐさき縄にて、断つべくもあらぬまでに纏むすわるる。中四尺を隔はてて近寄るに力なく、離るるに術すべなし。たとい忌いまわしき絆きずななりとも、この縄の切れて二人離れ離れにおらんよりはとは、その時苦しきわが胸の奥なる心こころ遣やりなりき。嚙かまるるとも螫ささるるとも、口縄の朽ち果つるまでかくてあらんと思ひ定めたるに、あら悲し。薔薇の花の紅くれないなるが、めらめらと燃え出いだして、繫つなげる

蛇を焼かんとす。しばらくして君とわれの間にあまれる一尋余
 りは、真中まなかより青き烟を吐いて金の鱗の色変り行くと思えば、あ
 やしき臭いにおを立ててふすと切れたり。身も魂もこれ限り消えて失
 せよと念ずる耳元に、何者かからからと笑う声して夢は醒めたり。
 醒めたるあとにもなお耳を襲う声はありて、今聞ける君が笑も、
 宵よべの名残かと骨を撼ゆるがす」と落ち付かぬ眼を長き睫まつげの裏に隠して
 ランスロツトの気色けしきを窺うかがう。七十五度の鬪技に、馬の脊せを滑すべるは
 無論、鍙あぶみさえはずせる事なき勇士も、この夢を奇くしとのみは思わ
 ず。快からぬ眉根は自ら逼おのずかりて、結べる口の奥には齒はさえ喰くひ締し
 ばるならん。

「さらば行こう。後おくれ馳ばせに北かたの方へ行こう」と拱こまぬいたる手を振

りほどいて、六尺二寸の軀からだをゆらりと起す。

「行くか？」とはギニヴィアの半ば疑える言葉である。疑える中には、今更ながら別れの惜まるる心地さえほのめいている。

「行く」といい放つて、つかつかと戸口にかかる幕を半ば掲げたが、やがてするりと踵くびすめぐを回らして、女の前に、白き手を執りて、発熱かと怪しまるるほどのあつき唇を、冷やかに柔らかき甲の上につけた。暁の露しげき百合ゆりの花はなびら弁をひたふるに吸える心地である。ランスロットは後あとをも見ずして石階を馳け降りる。

やがて三たび馬の嘶いななく音ねがして中庭の石の上に堅き蹄が鳴るとき、ギニヴィアは高たかど殿どのを下りて、騎士の出づべき門の真上なる窓に倚よりて、かの人の出いづるを遅しと待つ。黒き馬の鼻はなづら面らが下に

見ゆるとき、身を半ば投げだして、行く人のために白き絹の尺ばかりなるを振る。頭に戴ける金冠の、美しき髪を滑りてか、からりと馬の鼻を掠めて砕くるばかりに石の上に落つる。

槍やりの穂先に冠をかけて、窓近く差し出したる時、ランスロットとギニヴィアの視線がはたと行き合う。「忌まわしき冠よ」と女は受けとりながらいう。「さらば」と男は馬の太腹をける。白き兜かぶとと挿毛さしげのさと靡なびくあとに、残るは漠々ぼくぼくたる塵ちりのみ。

二 鏡

ありのままなる浮世を見ず、鏡に写る浮世のみを見るシャロット

トの女は高き台うてなの中に只一人住む。活ける世を鏡の裡うちにのみ知る者おもてに、面を合あわす友のあるべき由なし。

春恋し、春恋しと囀ささずる鳥の数々に、耳側そばだてて木の葉隠れの翼の色を見んと思えば、窓に向わずして壁に切り込む鏡に向う。鮮あざやかに写る羽の色に日の色さえもそのままである。

シャロットの野に麦刈る男、麦打つ女の歌にやあらん、谷を渡り水を渡りて、幽かすかなる音の高き台に他界の声の如く糸と細りて響く時、シャロットの女は傾けたる耳を掩おおうてまた鏡に向う。河のあなたに烟けぶる柳の、果ては空とも野とも覺おぼ束つかなき間より洩もれ出いづる悲ししき調しらべと思えばなるべし。

シャロットの路みち行く人もまた悉ことごとくシャロットの女の鏡に写る。

あるときは赤き帽の首打ち振りて馬追うさまも見ゆる。あるときは白き髻ひげの寛ゆるき衣を纏まといて、長つえき杖の先に小ひさき瓢きやくを括くくしつけないがら行く巡礼姿も見える。又あるときは頭かしらよりただ一枚と思わるる真白うわぎかぶの上衣被りて、眼口も手足も確しかと分ちかねたるが、けたたましげに鉦打かねち鳴らして過ぎるも見ゆる。これは癩らいをやむ人の前世ごうみずかの業を自ら世に告ぐる、むごき仕打ちなりとシャロットの女は知るすべもあらぬ。

旅商人たびあきゆうどの脊せに負つえる包つみの中には赤きリボンのあるか、白き下着さんごのあるか、珊瑚さんご、瑪瑙めのう、水晶、真珠のあるか、包める中を照らさねば、中にあるものは鏡には写らず。写らねばシャロットの女ひとみの眸ひとみには映うつぜぬ。

古き幾世を照らして、今の世にシャロットにありとある物を照らす。悉く照らして扱えらぶ所なければシャロットの女の眼に映るものもまた限りなく多い。ただ影なれば写りては消え、消えては写る。鏡のうちに永ながく停とどまる事は天に懸かる日といえども難かたい。活いける世の影なればかく果敢はかなきか、あるいは活ける世が影なるかとシャロットの女は折々疑う事がある。明らさまに見ぬ世なれば影ともまこととも断じがたい。影なれば果敢なき姿を鏡にのみ見て不足はなからう。影ならずば——時にはむらむらと起る一念に窓際に馳かけよりにて思うさま鏡の外ほかなる世を見んと思ひ立つ事もある。シャロットの女の窓より眼を放つときはシャロットの女の呪のろいのかかる時である。シャロットの女は鏡の限る天地のうちに跼き

よくせき

踏よくせき せねばならぬ。一重隔て、二重隔てて、広き世界を四角に切るとも、自滅の期を寸時も早めてはならぬ。

去れどありのままなる世は罪に濁ると聞く。住み倦うめば山に遯のがるる心安さもあるべし。鏡の裏うちなる狭き宇宙の小さければとて、憂うき事の降りかかる十字の街ちまたに立ちて、行き交かう人に氣を配る辛つらさはあらず。何者か因果の波を一たび起してより、万ばんけい頃けいの乱れは永えいごう劫ごうを極めて尽きざるを、渦捲まく中に頭かしらをも、手をも、足をも攪さらわれて、行くわれの果はては知らず。かかる人を賢しといわば、高うき台うてなに一人を住み古りて、しろかねの白き光りの、表とも裏とも分ちがたきあたりに、幻の世を尺に縮めて、あらん命を土ささえ踏あほうまで過すは阿呆あほうの極みであろう。わが見るは動く世ならず、動

く世を動かぬ物の助たすけにて、よそながら窺うかがう世なり。活殺生かつさつしようじ死
 の乾けんこん坤こんを定裏じょうりに拈ねんしゆつ出して、五彩の色相を静中に描く世な
 り。かく観ずればこの女の運命もあながちに嘆くべきにあらぬを、
 シヤロツトの女は何に心を躁さわがして窓の外そとなる下界を見んとする。
 鏡の長さは五尺に足らぬ。黒鉄くろがねの黒きを磨みがいて本来の白きに
 帰すマーリンの術になるとか。魔法に名を得し彼のいう。——鏡
 の表に霧こめて、秋の日の上れども晴れぬ心地なるは不吉の兆な
 り。曇かがみる鑑の霧を含みて、芙蓉ふように滴したたる音を聴きくとき、対むかえる人
 の身の上に危うき事あり。然けきぜんと故なきに響ゆえを起して、白き筋
 の横縦に鏡に浮くとき、その人末期まつごの覚悟せよ。——シヤロツト
 の女が幾いくとしつき年月の久しき間この鏡に向えるかは知らぬ。朝あしたに向い

夕ゆうべに向い、日に向い月に向いて、厭あくちよう事のあるをさえ忘れ
 たるシャロットの女の眼には、霧立つ事も、露置く事もあらざれ
 ば、まして裂けんとする虞おそれありとは夢にだも知らず。湛たんぜん然とし
 て音なき秋の水に臨むが如く、瑩えいろう朗たる面を過ぐる森羅しんらの影の、
 繽ひんぶん紛として去るあとは、太古の色なき境さかいをまのあたりに現わす。
 無限上に徹する太たい空くうを鑄固めて、打てば音ある五尺うちの裏おに押し
 集めたるを——シャロットの女は夜ごと日ごとに見る。
 夜ごと日ごとに鏡に向える女は、夜ごと日ごとに鏡の傍そばに坐り
 て、夜ごと日ごとの繒はたを織る。ある時は明るき繒はたを織り、ある時
 は暗き繒はたを織る。

シャロットの女の投ぐる梭ひの音を聴く者は、淋さびしき臯おかの上に立

つ、高き台うてなの窓を恐る恐る見上げぬ事はない。親も逝き子も逝きて、新しき代よにただ一人取り残されて、命長きわれを恨み顔なる年寄の如く見ゆるが、岡の上なるシャロットの女の住居すまいである。蔦鎖つたぎす古き窓より洩もるる梭の音の、絶間たえまなき振子しんしの如く、日を刻むに急なる様なれど、その音はあの世の音なり。静しずかなるシャロットには、空気さえ重たげにて、常ならば動くべしとも思われぬを、ただこの梭の音のみにそそのかさされて、幽かにも震うか。淋しきは音なき時の淋しさにも勝まさる。恐る恐る高き台を見上げたる行こうじ人は耳みみを掩おほうて走る。

シャロットの女の織るは不断の繒はたである。草むらの萌草もえぐさの厚く茂れる底に、釣鐘の花の沈める様を織るときは、花の影のいつ

浮くべしとも見えぬほどの濃き色である。うな原のうねりの中に、
 雪と散る浪なみの花を浮かすときは、底知れぬ深さを一枚の薄きに畳
 む。あるときは黒き地じに、燃ゆる焰ほのおの色にて十字架を描く。濁じよく
 世せにはびこる罪障の風は、すきまなく天下を吹いて、十字を織
 れる経緯たてよこの目にも入ると覚しく、焰のみは繒はたを離れて飛ばんと
 す。——薄暗き女の部屋は焚やけ落つるかど怪しまれて明るい。

恋の糸まことと誠まことの糸を横縦に梭くぐらせば、手を肩に組み合せて天
 を仰げるマリヤの姿となる。狂いを経たてに怒りを緯よこに、霰あられふる木こがら
 枯しの夜を織り明せば、荒野の中に白き髯ひげ飛ぶリアの面影が出る。
 恥はずかしき紅くれないと恨めしき鉄色をより合せては、逢うて絶えたる人
 の心を読むべく、温和おとなしき黄あはと思い上ががれる紫あざを交かわる交かわるに畳め

ば、魔に誘われし乙女の、我は顔に高ぶれる態を写す。長き袂に雲の如くにまつわるは人に言えぬ願の糸の乱れなるべし。

シャロツトの女は眼深く額広く、唇さえも女には似で薄からず。夏の上りてより、刻を盛る砂時計の九たび落ち尽したれば、今ははや午過ぎなるべし。窓を射る日の眩ゆきまで明かなるに、室のうちは夏知らぬ洞窟の如くに暗い。輝けるは五尺に余る鉄の鏡と、肩に漂う長き髪のみ。右手より投げたる梭を左手に受けて、女はふと鏡の裡を見る。研ぎ澄したる剣よりも寒き光の例ながらうぶ毛の末をも照すよと思ううちに——底事ぞ！音なくて颯と曇るは霧か、鏡の面は巨人の息をまともに浴びたる如く光を失う。今まで見えたシャロツトの岸に連なる柳も隠れる。柳の

中を流るるシャロツトの河も消える。河に沿うて往ゆきつ来りつする人影は無論ささぬ。——梭の音ははたとやんで、女の臉まぶたは黒き睫まつげと共に微かすかに顫ふるえた。「凶事か」と叫んで鏡の前に寄るとき、曇は一いつさつ刷に晴れて、河も柳も人影も元の如くに見あらわれる。梭は再び動き出す。

女はやがて世にあるまじき悲しき声にて歌う。

うつせみの世を、

うつつに住めば、

住みうからまし、

むかしも今も。」

うつくしき恋、

うつす鏡に、

色やうつろう、

朝な夕なに。」

鏡の中なる遠とおやなぎ柳の枝が風に靡なびいて動く間に、忽ち銀の光が

さして、熱き埃ほこりを薄く揚げ出す。銀の光りは南より北に向つて

真一文字にシャロットに近付いてくる。女は小羊を覗ねらう驚わしの如く

に、影とは知りながら瞬またたきもせず鏡の裏を見詰みつむる。十丁にして尽

きた柳の木立こたちを風の如くに駈かけ抜けたものを見ると、鍛え上げた

鋼の鎧はがねに満身の日光を浴びて、同じ兜かぶとの鉢はち金がねよりは尺に余る白

き毛を、飛び散れとのみさんさん々と靡かしている。栗毛くりげの駒こまの逞たくまし

きを、頭かしらも胸かわも革つづに裹つづみて飾びようれる鉾ふるの数は篩ふるい落せし秋の夜の星せ

いしゆく
宿を一度に集めたるが如き心地である。女は息を凝らして眼を据^すえる。

曲^{どて}がれる堤に沿うて、馬の首を少し左へ向け直すと、今までは横にのみ見えた姿が、真正面に鏡にむかつて進んでくる。太き槍をレストに収めて、左の肩に盾^{たて}を懸けたり。女は領^{えり}を延ばして盾に描ける模様を確^{しか}と見分けようとする体^{てい}であつたが、かの騎士は何の会釈もなくこの鉄鏡を突き破つて通り抜ける勢^{いきおい}で、いよいよ目の前に近づいた時、女は思わず梭^{ひな}を抛^なげて、鏡に向つて高くランスロットと叫んだ。ランスロットは兜^{かぶと}の廂^{ひさし}の下より耀^{かがや}く眼を放つて、シャロットの高^{うてな}き台を見上げる。爛^{らんらん}々たる騎士の眼と、針^{つか}を束ねたる如き女の鋭^とどき眼とは鏡の裡^{うち}にてはたと出合つた。

この時シャロットの女は再び「サー・ランスロット」と叫んで、忽ち窓の傍そばに馳かけ寄つて蒼あおき顔を半ば世の中に突き出すいだ。人と馬とは、高き台の下を、遠きに去る地震の如くに馳け抜ける。

ぴちりと音がして皓こうこう々たる鏡は忽ち真二つに割れる。割れた

おもてる面は再びぴちぴちと氷を砕くが如く粉微塵こなみじんになつて室しつの中に飛

ぶ。七ななまき卷八やまき卷織りかけたる布帛きぬはふつふつと切れて風なきに鉄

片と共に舞い上る。紅の糸、緑の糸、黄の糸、紫の糸はほつれ、

千切ちぎれ、解け、もつれて土蜘蛛つちぐもの張る網の如くにシャロットの女

の顔に、手に、袖に、長き髪の毛にまつわる。「シャロットの女を

殺すものはランスロット。ランスロットを殺すものはシャロット

の女。わが末期まつごの呪のろいを負うて北の方かたへ走れ」と女は両手を高く天

に挙げて、朽ちたる木の野分のわきを受けたる如く、五色の糸と氷あじむを欺く碎片の乱るる中にどうと仆たおれる。

三 袖

可憐かれんなるエレーンは人知らぬ堇すみれの如くアストラットの古城を照らして、ひそかに墜おちし春の夜の星の、紫深き露に染まりて月日を経たり。訪とう人は固もとよりあらず。共に住むは二人の兄まゆと眉まゆさえ白き父親のみ。

「騎士はいずれに去る人ぞ」と老人は穏かなる声にて訪う。

「北かたの方なる仕合に参らんと、これまでは鞭むちうつて追懸けたれ。夏

の日の永きにも似ず、いつしか暮れて、暗がりに路さえ岐れたるを。——乗り捨てし馬も恩に嘶かん。一夜の宿の情け深きに酬いまつるものなきを恥ず」と答えたるは、具足を脱いで、黄なる袍に姿を改めたる騎士なり。シャロットを馳せる時何事とは知らず、岩の凹みの秋の水を浴びたる心地して、かりの宿りを求め得たる今に至るまで、頬の蒼きが特更の如くに目に立つ。

エレーンは父の後ろに小さき身を隠して、このアストラットに、如何なる風の誘いてか、かく凜々しき壯夫を吹き寄せたると、折々は鶴と瘠せたる老人の肩をすかして、恥かしの睫の下よりランスロットを見る。菜の花、豆の花ならば戯るる術もあるう。偃蹇として澗底に嘯く松が枝には舞い寄る路のとてもなければ、

白き胡蝶こちようは薄き翼を収めて身動きもせぬ。

「無心ながら宿貸す人に申す」とややありてランスロットがいう。
「明日あすと定まる仕合の催しに、後おくれて乗り込む我の、何の誰たれよと人に知らるるは興なし。新しきを嫌きらわず、古きを辞せず、人の見知らぬ盾たてあらば貸し玉え」

老人ははたと手を拍うつ。「望める盾を貸し申そう。——長男チアーは去さんぬる騎士の鬪技に足を痛めて今なお蓐じよくを離れず。その時彼が持ちたるは白地に赤く十字架を染めたる盾なり。ただの一度の仕合きずつに傷きずつて、その創きずぐち口はまだ癒いえざれば、赤き血架むなは空しく壁に古りたり。これを翳かざして思う如く人々を驚かし給え」
ランスロットは腕うでを扼やくして「それこそは」という。老人はなお

言葉を継ぐ。

「次男ラヴェンは健気けなげに見ゆる若者にてあるを、アーサー王もよおしの催にかかる晴の仕合に参り合わせずば、騎士の身の口惜しかるべし。ただ君が栗毛ひづめの蹄のあとに俱ぐし連れよ。翌日あすを急げと彼に申し聞かせんほどに」

ランスロットは何の思案もなく「心得たり」と心安げにいう。老人の頬ほおに畳める皺しわのうちには、嬉うれしき波がしばらく動く。女ならずばわれも行かんと思えるはエレーンである。

木に倚よるは蔦つた、まつわりて幾世を離れず、宵よいに逢あいて朝あしたに分る君と我の、われにはまつわるべき月日もあらず。織ほそき身の寄り添あらしわば、幹吹く嵐あらしに、根なしかずらと倒れもやせん。寄り添あらしわらず

ば、人知らずひそかに括る恋の糸、振り切つて君は去るべし。愛
 溶けて瞼に余る、露の底なる光りを見ずや。わが住める館こそ古
 るけれ、春を知る事は生れて十八度に過ぎず。物の憐れの胸に漲
 るは、鎖せる雲の自ら晴れて、麗かなる日影の大地を渡るに異な
 らず。野をうずめ谷を埋めて千里の外に暖かき光りをひく。明か
 なる君が眉目にはたと行き逢える今の思は、坑を出でて天下の春
 風るかぜに吹かれたるが如きを——言葉さえ交わさず、あすの別れと
 はつれなし。

燭しよく尽きて更こうを惜おしめども、更尽きて客は寝ねたり。寝ねたるあと
 にエレーンは、合あわぬ瞼の間より男の姿の無理に瞳ひとみの奥に押し入
 らんとするを、幾たびか払い落さんと力つとめたれど詮せんなし。強いて

合わぬ目を合せて、この影を追わんとすれば、いつの間にかその人の姿は既に瞼の裏に潜む。苦しき夢に襲われて、世を恐ろしと思ひし夜もある。魂消える物の怪の話におののきて、眠らぬ耳に鶏の声をうれしと起き出でた事もある。去れど恐ろしきも苦しきも、皆われ安かれと願う心の反響に過ぎず。われという可愛き者の前に夢の魔を置き、物の怪の祟りを据えての恐と苦しみである。今宵の悩みはそれらにはあらず。我という個霊の消え失せて、求むれども遂に得がたきを、驚きて迷いて、果ては情なくてかくは乱るるなり。我を司どるものの我にはあらで、先に見し人の姿なるを奇しく、怪しく、悲しく念じ煩うなり。いつの間に我はランスロットと変りて常の心はいずこへか喪える。エレーンとわが名

を呼ぶに、応うるはエレインならず、中庭に馬乗り捨てて、ひさし廂深
かぶとき兜の奥より、やぐら高き櫓を見上げたランスロットである。再びエ
 レインと呼ぶにエレインはランスロットじやと答える。エレイン
 は亡うせてかと思えばありという。いずこにと聞けば知らぬという。
 エレインは微かすかなる毛孔けあなの末に潜みて、いつか昔しの様に帰らん。
 エレインに八万四千の毛孔ありて、エレインが八万四千壺この香油
 を注いで、日にその膚はだえなめらを滑かにするとも、潜めるエレインは遂に
 出現きたし来る期ごはなからう。

やがてわが部屋の戸帳とばりを開きて、エレインは壁に釣つる長きぬき衣ぎぬを
 取り出すいだ。燭にすかせば燃ゆる真紅の色なり。室にはびこる夜よるを
 呑のんで、一枚の衣に真昼の日影を集めたる如く鮮あざやかである。エレ

ーンは衣の領を右手につるして、暫らくは眩ゆきものと眺めたるが、やがて左に握る短刀を鞘ながら二、三度振る。からからと床に音さして、すわという間に閃きは目を掠めて紅深きうちに隠れる。見れば美しき衣の片袖は惜気もなく断たれて、残るは鞘の上
 にふわりと落ちる。途端に裸ながらの手燭は、風に打たれて颯と消えた。外は片破月の空に更けたり。

右手に捧ぐる袖の光をしるべに、暗きをすりぬけてエレーンはわが部屋を出る。右に折れると兄の住居、左を突き当れば今宵の客の寝所である。夢の如くなよやかなる女の姿は、地を踏まざるに歩めるか、影よりも静かにランスロットの室の前にとまる。――ランスロットの夢は成らず。

聞くならくアーサー大王のギニヴィアを娶らんとして、心惑え
 る折、居ながらに世の成行を知るマーリンは、首を掉りて慶事
 を肯んぜず。この女後に思わぬ人を慕う事あり、娶る君に悔あら
 ん。とひたすらに諫めしとぞ。聞きたる時の我に罪なければ思わ
 ぬ人の誰なるかは知るべくもなく打ち過ぎぬ。思わぬ人の誰なる
 かを知りたる時、天が下に数多く生れたるものうちにて、この
 悲しき命に廻り合せたる我を恨み、このうれしき幸を享けたる己
 れを悦びて、楽みと苦みの縋りたる繩を断たんともせず、この年
 月を経たり。心疚ましきは願わず。疚ましき中に蜜あるはうれ
 し。疚ましければこそ蜜をも醸せと思ふ折さえあれば、卓を共に
 する騎士の我を疑うこの日に至るまで王妃を棄てず。ただ疑の積

もりて証拠あかしと凝らん時——ギニヴィアの捕われて杭くいに焼かるる時——この時を思えばランスロットの夢はいまだ成らず。

眠られぬ戸に何物かちよと障さわった気合けわいである。枕を離るる頭かしらの、音する方かたに、しばらくは振り向けるが、また元の如く落ち付いて、あとは古城の亡骸なきがらに脈も通わず。静しずかである。

再び障さわった音は、殆ほとんど敲たたいたというべくも高い。慥たしかに人ありと思ひ極きわめたるランスロットは、やおら身を臥所ふしどに起して、

「たぞ」といいつつ戸を半ば引く。差しつくる蠟燭ろうそくの火のふき込められしが、取り直して今度は戸口に立てる乙女かたの方にまたたく。乙女の顔は翳かげせる赤き袖の影に隠れている。面映おもはゆきは灯ともし火びのみならず。

「この深き夜を……迷えるか」と男は驚きの舌を途切れ途切れに動かす。

「知らぬ路にこそ迷え。年古るく住みなせる家のうちを——鼠だに迷わじ」と女は微かなる声ながら、思い切つて答える。

男はただ怪しとのみ女の顔を打ち守る。女は尺に足らぬ紅絹の衝立ついたてに、花よりも美しくしき顔をかくす。常に勝る豊まさ類ほうきようの色は、湧く血潮わの疾く流るるか、あざやかなる絹のたすけか。ただ隠しかねたる鬢びんの毛の肩に乱れて、頭には白き薔薇を輪に貫ぬきて三輪挿さしたり。

白き香りの鼻を撲つて、絹の影なる花の数さえ見分けたる時、ランスロットの胸には忽ちギニヴィアの夢の話が湧き帰る。何なにゆ

故とは知らず、ことごと悉く身はな痿えて、手に持つ燭を取り落せるかと驚ろきて我に帰る。乙女はわが前に立てる人の心を読む由もあらず。

「くれない紅に人のまことはあれ。恥ずかしの片袖を、こ乞われぬに参らする。かぶとま兜に捲いて勝負せよとの願なり」とかの袖を押し遣る如く前にいだ出す。男は容易に答えぬ。

「女の贈り物受けぬ君は騎士か」とエレーンは訴うる如くに下よりランスロットの顔をのぞ覗く。覗かれたる人は薄き唇を一文字に結んで、燃ゆる片袖を、右の手に半ば受けたるまま、当惑の眉を思案に刻む。ややありていう。たたかい「戦に臨む事は大小六十余度、闘技の場に登つて槍を交えたる事はその数を知らず。いまだ佳人の贈

り物を、身に帯びたる試^{ため}しなし。情^{なさけ}あるあるじの子の、情深き賜物を辞^{いな}むは礼なければ……」

「礼ともいえ、礼なしともいいてやみね。礼のために、夜^よを冒して参りたるにはあらず。思^{おも}の籠^{こも}るこの片袖を天が下の勇士に贈らんとために参りたり。切に受けさせ給え」とここまで踏み込みたる上は、かよわき乙女の、かえつて一徹に動かすべくもあらず。ランスロットは惑^{まど}う。

カメロットに集まる騎士は、弱きと強きを通じてわが盾の上に描かれたる紋章を知らざるはあらず。またわが腕に、わが兜に、美しき人の贈り物を見たる事なし。あすの試合に後るるは、始^{はじめ}より出づるはずならぬを、半途より思い返しての仕業^{しわざ}故である。

闘技らうちの埒らちに馬乗り入れてランスロットよ、後れたるランスロットよ、と謳うたわるるだけならばそれまでの浮名である。去れど後れたるは病のため、後れながらも参りたるはまことの病にあらざる証あ拠かよといわば何と答えん。今幸さいわいに知らざる人の盾を借りて、知らざる人の袖を纏まとい、二十三十の騎士を斃たおすまで深くわが面おもてを包まば、ランスロットと名乗りをあげて人驚かす夕暮に、——誰たかれ彼共らにわざと後れたる我を肯うけがわん。病と臥せる我の作さりやく略を面白しと感ずる者さえあろう。——ランスロットは漸ようやくに心を定める。

部屋のあなたに輝くは物の具である。鎧よろいの胴たねに立て懸けたるわが盾を軽かるがる々と片手に提さげて、女の前に置きたるランスロットはいう。

「嬉しき人の真心を兜にまくは騎士の誉れほま。ありがたし」とかの袖を女より受取る。

「うけてか」と片頬かたほに笑えめる様は、谷間の姫百合ひめゆりに朝日影さして、しげき露の痕あとなく睨かわけるが如し。

「あすの勝負に用なき盾を、逢うまでの形身かたみと残す。試合果てて再びよここを過ぎるまで守り給え」

「守らでやは」と女は跪ひざまずいて両手に盾を抱いだく。ランスロットは長き袖を眉のあたりに掲げて、「赤し、赤し」という。

この時櫓やぐらの上を烏鳴からすき過ぎて、夜よはほのぼのと明け渡る。

四 罪

アーサーを嫌きらうにあらず、ランスロットを愛するなりとはギニ
 ヴィアの己おのれにのみ語る胸のうちである。

北かたの方なる試合果かたてて、行けるものは皆館やかたに帰れるを、ランス
 ロットののみは影くつわさえ見えず。帰れかしと念たよずる人の便たよりは絶えて、
 思おもわぬもののくつわを連ねてカメロットに入るは、見るも益なし。一
 日には二日を数え、二日には三日を数え、遂ついに両手の指ことごとを悉く折
 り尽して十日に至る今こんにち日ひまでなお帰るべしとの願ねがいを掛かけたり。
 「遅おそき人のいずこに繋つながれたる」とアーサーはさまでに心を悩なやま
 せる気色けしきもなくいう。

高たかき室むろの正面しつに、石にて築く段は二級、半ばは厚もうき毛氈せんにて

蔽おほう。段の上なる、大なる椅子いすに豊かに倚よるがアーサーである。

「繫ぐ日も、繫ぐ月もなきに」とギニヴィアは答うるが如く答へざるが如くもてなす。王を二尺左に離れて、床しょうぎ几ぎの上に、織ほそき指を組み合せて、膝ひざより下は長き裳もすそにかくれて履くつのありかさえ定かならず。

よそよそしくは答えたれ、心はその人の名を聞きてさえ躍おどるを。話しの種の思う坪はに生はえたるを、寒き息にて吹き枯らすは口惜し。ギニヴィアはまた口を開く。

「後おくれて行くものは後れて帰おきてる掟おきてか」といい添かたえて片かた頬ほに笑う。女の笑うときは危あやうい。

「後れたるは掟ならぬ恋の掟なるべし」とアーサーも穏かに笑う。

アーサーの笑にも特別の意味がある。

恋という字の耳に響くとき、ギニヴィアの胸は、錐きりに刺されし痛いたみを受けて、すわやと躍り上る。耳の裏には颯さと音がして熱き血を注さす。アーサーは知らぬ顔である。

「あの袖そでの主こそ美しからん。……」

「あの袖とは？ 袖の主とは？ 美しからんとは？」とギニヴィアの呼吸ははずんでいる。

「白き挿毛さしげに、赤き鉢巻ぞ。さる人の贈り物とは見たれ。繋がるも道理じゃ」とアーサーはまたからからと笑う。

「主の名は？」

「名は知らぬ。ただ美しき故に美しき少女というと聞く。過ぐる

十日を繋がれて、残る幾日を繋がるる身は果報なり。カメロットに足は向くまじ」

「美しき少女！ 美しき少女！」と続け様に叫んでギニヴィアは薄き履くつに三たび石の床ゆかを踏みならず。肩に負う髪の時ならぬ波を描いて、二尺余りを一筋ごとに末まで渡る。

夫ふたごころに一一心なきを神の道との教おしえは古るし。神の道に従うの心易きも知らずといわじ。心易きを自ら捨てて、捨てたる後の苦しみを嬉うれしと見しも君がためなり。春風しゅんぷうに心なく、花おのずか自ら開く。花に罪ありとは下くだれる世の言の葉に過ぎず。恋を写す鏡の明なるは鏡の徳なり。かく観うずる裡うちに、人にも世にも振り棄すてられたる時の慰藉いしやはあるべし。かく観うぜんと思い詰めたる今頃を、わが乗れ

る足台は覆えくつがされて、踵くびすを支さうるに一塵いちじんだになし。引き付けられたる鉄と磁石の、自然に引き付けられたれば咎とがも恐れず、世を憚はばかりの関せき一重せきひとえあなたへ越せば、生涯の落ち付おはあるべしと念じたるに、引き寄せたる磁石は火打石と化して、吸われし鉄は無限の空裏よみを冥府おへ隕おつる。わが坐すわる床几こくの底抜けて、わが乗る壇の床崩くずれて、わが踏ふむ大地の殻裂こくけて、己れを支さうる者は悉く消えたるに等し。ギニヴィアは組める手を胸の前に合せたるまま、右左より骨も摧くだけよと圧おす。片手に余る力を、片手に抜いて、苦しき胸もの悶もだえを人知れぬ方かたへ洩もらさんとするなり。

「なに事ぞ」とアーサーは聞く。

「なに事とも知らず」と答こたへたるは、アーサーを欺あざけるにもあら

ず、また己おのれを誣しいたるにもあらず。知らざるを知らずといえるの
 み。まことはわが口にせる言葉すら知らぬ間に咽のどを転まろび出いでたり。
 ひく浪なみの返す時は、引く折の気色を忘れて、逆しまに岸を嚙かむ
 勢いきおいの、前よりは凄すさまじきを、浪みづか自らさえ驚くかと疑う。はからざる
 便りの胸を打ちて、度を失えるギニヴィアの、己れを忘るるまで
 われに遠とほざかれる後には、油ゆうぜん然として常よりも切なきわれに復かえ
 る。何事も解せぬ風情ふぜいに、驚ろきの眉まゆをわが額の上にあつめたる
 アーサーを、わが夫と悟れる時のギニヴィアの眼には、アーサー
 は少しばらく前のアーサーにあらず。

人を傷きずけたるわが罪を悔きゆるとき、傷負える人の傷ありと心付
 かぬ時ほど悔くの甚はなはだしきはあらず。聖徒に向つて鞭むちを加くえたる非の

恐しきは、鞭むちうてるものの身に跳はね返る罰なきに、自らみずかとその非を悔いたればなり。われを疑うアーサーの前に恥ずる心は、疑わぬアーサーの前に、わが罪を心のうちに鳴らすが如く痛からず。ギニヴィアは、慄しょうぜん然ぜんとして骨に徹する寒さを知る。

「人の身の上はわが上とこそ思え。人恋わぬ昔は知らず、嫁とつぎてより幾夜か経たる。赤き袖の主のランスロットを思う事は、御身おんみのわれを思う如くなるべし。贈り物あらば、われも十日を、二十はつ日かを、帰るを、忘るべきに、罵ののしるは卑いやし」とアーサーは王妃の方かたを見て不審の顔付である。

「美しき少女！」とギニヴィアは三たびエレインの名を繰り返す。このたびは鋭どき声にあらず。去りとは憐あわれを寄せたりとも見え

ず。

アーサーは椅子に倚る身を半ば回めぐらしていう。「御身とわれと始めて逢える昔を知るか。丈じょうに余る石の十字を深く地に埋うずめたるに、薦つたは這はいかかる春の頃なり。路みちに迷まいて御堂みどうにしばし憩いこわんと入れば、銀ちりに鏤うばむ祭壇の前に、空色の衣きぬを肩より流して、黄金こがねの髪に雲を起せるは誰たぞ」

女はふるえる声にて「ああ」とのみいう。床ゆかしからぬにもあらぬ昔の、今は忘るるをのみ心易しと念じたる矢先に、忽こつぜん然と容赦もなく描き出されたるを堪えがたく思う。

「安からぬ胸に、捨てて行ける人の帰るを待つと、凋しおれたる声にてわれに語る御身の声をきくまでは、天あまつ下くだれるマリヤのこの寺

の神壇に立てりとのみ思えり」

逝ける日は追えども帰らざるに逝ける事は長しえに暗きに葬むる能わず。思ふまじと誓える心に発矢と中る古き火花もあり。

「伴いて館に歸し参らせんといえは、黄金の髪を動かして何処へとも、とうなずく……」と途中に句を切つたアーサーは、身を起こして、両手にギニヴィアの頬を抑えながら上より妃の顔を覗き込む。新たなる記憶につれて、新たなる愛の波が、一しきり打ち返したのであろう。——王妃の顔は屍を抱くが如く冷たい。アーサーは覚えぬ抑えたる手を放す。折から廻廊を遠く人の踏む音がして、罵る如き幾多の声は次第にアーサーの室に逼る。

入口に掛けたる厚き幕は総に絞らず。長く垂れて床をかくす。

かの足音の戸の近くしばらくとまる時、垂れたる幕を二つに裂いて、髪多く丈高き一人の男があらわれた。モードレッドである。

モードレッドは会釈もなく室の正面までつかつかと進んで、王の立てる壇の下にとどまる。続いて入るはアグラヴェン、逞ましき腕の、寛き袖を洩れて、赭き頸の、かたく衣の襟に括られて、色さえ変るほど肉づける男である。二人の後には物色する違なきに、どやどやと、我勝ちに乱れ入りて、モードレッドを一人前に、ずらりと並ぶ、数は凡てにて十二人。何事かなくては叶わぬ。

モードレッドは、王に向つて会釈せる頭を擡げて、そこ力のある声にていう。「罪あるを罰するは王者の事か」

「問わずもあれ」と答えたアーサーは今更という面持である。

「罪あるは高きをも辞せざるか」とモードレットは再び王に向つて問う。

アーサーは我とわが胸を敲いて「黄金の冠は邪の頭に戴かず。天子の衣は悪を隠さず」と壇上に延び上る。肩に括る緋の衣の、裾は開けて、白き裏が雪の如く光る。

「罪あるを許さずと誓わば、君が傍に坐せる女をも許さじ」とモードレットは臆する気色もなく、一指を挙げてギニヴィアの眉間を指す。ギニヴィアは屹と立ち上る。

茫然たるアーサーは雷火に打たれたる唾の如く、わが前に立てる人——地を抽き出でし巖とばかり立てる人——を見守る。口を開けるはギニヴィアである。

「罪ありと我を誣しいるか。何をあかしに、何の罪を数えんとはする。詐いつわりは天も照覧あれ」と織ほそき手を抜け出でよと空高く挙げる。「罪は一つ。ランスロットに聞け。あかしはあれぞ」と鷹たかの眼を後ろに投ぐれば、並びたる十二人は悉く右の手を高く差し上げつつ、「神も知る、罪は逃のがれず」と口々にいう。

ギニヴィアは倒れんとする身を、危く壁掛たすに扶けて「ランスロット！」と幽かすかに叫ぶ。王は迷う。肩に纏まつわる緋の衣の裏を半ば返して、右手めてたなごころの掌を十三人の騎士に向けたるままにて迷う。

この時館の中に「黒し、黒し」と叫ぶ声が石せきちように響ひびきを反かえして、窈ようぜん然と遠く鳴る木枯こがらしの如く伝わる。やがて河に臨む水門を、天にひびけと、鏗さびたる鉄鎖きしに軋きしらせて開く音がする。室の

中なる人々は顔と顔を見合わす。只事ただごとではない。

五 舟

「整かぶとに巻ける絹の色に、槍突き合わす敵の目も覚さむべし。ランスロットはその日の試合に、二十余人の騎士をたおして、引き挙ぐる間際まぎわに始めてわが名をなまのる。驚く人の醒さめぬ間まを、ラヴェンと共に埒らちを出でたり。行く末は勿論もちろんアストラットじゃ」と三日過ぎてアストラットに帰れるラヴェンは父と妹に物語る。

「ランスロット？」と父は驚きの眉まゆを張る。女は「あな」とのみ髪さに挿さす花の色を顫ふるわす。

「二十余人の敵と渡り合えるうち、何者かの槍を受け損じてか、
鎧の胴を二寸下りて、左の股に創を負う……」

「深き創か」と女は片唾を呑んで、懸念の眼を睜る。

「鞍に堪えぬほどにはあらず。夏の日の暮れがたきに暮れて、蒼
き夕を草深き原のみ行けば、馬の蹄は露に濡れたり。——二人は
一言も交わさぬ。ランスロットの何の思案に沈めるかは知らず、
われは昼の試合のまたあるまじき派手やかさを偲ぶ。風渡る梢も
なければ馬の沓の地を鳴らす音のみ高し。——路は分れて二筋と
なる」

「左へ切れればここまで十哩じや」と老人が物知り顔にいう。

「ランスロットは馬の頭を右へ立て直す」

「右？ 右はシャロットへの本街道、十五哩は確かにあろう」これも老人の説明である。

「そのシャロットの方かたへ——後あとより呼ぶわれを顧みもせで轡くつわを鳴らして去る。やむなくてわれも従う。不思議なるはわが馬を振り向けんとしたる時、前足を躍らしてあやしくも嘶いななける事なり。嘶く声の果はて知らぬ夏野に、末広に消えて、馬の足搔あがきの常の如く、わが手綱たづなの思うままに運びし時は、ランスロットの影は、夜よと共に微かすかなる奥に消えたり。——われは鞍たたを敲たたいて追う」

「追いついてか」と父と妹は声を揃そろえて問う。

「追いつける時は既に遅くあつた。乗る馬の息の、闇やみ押し分けて白く立ち上るを、いやがうえに鞭むちうつて長き路を一散に馳かけ通す。

黒きもののそれかとも見ゆる影が、二丁ばかり先に現われたる時、われは肺を逆しまにしてランスロットと呼ぶ。黒きものは聞かざる真似まねして行く。幽かすかに聞えたるは轡くつわの音か。怪しきは差して急げる様もなきに容易たやすくは追いつかれず。漸ようやくの事間あいだ一丁ほどに逼せまりたる時、黒きものは夜の中に織り込まれたる如く、ふつと消える。合点行がてんかぬわれは益追ますますう。シヤロットの入口に渡したる石橋に、蹄も砕けよと乗り懸けしと思えば、馬は何物にか躓つまずきて前足を折る。騎のるわれは鬣たてがみをさかに扱こいて前にのめる。憂かつと打つは石の上と心得しに、われより先に斃たおれたる人の鎧よろいの袖なり」

「あぶない！」と老人は眼の前の事の如くに叫ぶ。

「あぶなきはわが上ならず。われより先に倒れたるランスロット

の事なり……」

「倒れたるはランスロットか」と妹は魂消ゆるほどの声に、椅子の端はじを握る。椅子の足は折れたるにあらず。

「橋の袂たもとの柳うちの裏うらに、人住むとしも見えぬ庵あんしつ室あるを、試みに
 敲たたげば、世のがを逃れたる隠士の居きよなり。幸いと冷たき人を担かつぎ入る。
 兜かぶとを脱げば眼さえ氷りて……」

「葉を掘り、草を煮るは隠士の常なり。ランスロットを蘇よみがえしてか」と父は話し半ばに我句を投げ入るる。

「よみ返しはしたれ。よみにある人と扱えらぶ所はあらず。われに帰りたるランスロットはまことのわれに帰りたるにあらず。魔に襲われて夢に物いう人の如く、あらぬ事のみ口走る。あるときは罪

々と叫び、あるときは王妃——ギニヴィア——シャロットという。隠士が心を込むる草の香りも、煮えたる頭には一点の涼気を吹かず。……」

「枕辺まくらべにわれあらば」と少女おとめは思う。

「一夜いちやの後のちたぎりたる脳の漸く平らぎて、静かなる昔の影のちらちらと心に映る頃、ランスロットはわれに去れという。心許さぬ隠士は去るなという。とかくして二日を経たり。三日目の朝、われと隠士の眠覚ねむりめて、病む人の顔色の、今朝けさ如何いかあらんと臥所ふしどを窺うかがえば——在あらず。劍つるぎの先さきにて古壁ふるかべに刻み残せる句には罪はわれを追い、われは罪を追うとある」

「逃のがれしか」と父は聞き、「いずこへ」と妹はきく。

「いざこと知らば尋ぬる便りもあらん。茫々ぼうぼうと吹く夏野の風の
 限りは知らず。西東日の通う境は極きわめがたければ、独ひとり帰り来ぬ。
 ——隠士いんしはいう、病やまい怠らで去る。かの人の身は危あやうし。狂くるいて走
 る方かたはカメロットなるべしと。うつつのうちに口走れる言葉にて
 それと察せしと見ゆれど、われは確しかと、さは思おもわず」と語り終つ
 て盃さかずきに盛る苦き酒を一息に飲のみ干して虹にじの如き氣を吹く。妹は立
 つてわが室に入る。

花に戯あそむる蝶ちょうのひるがえるを見れば、春うれいに憂うれありとは天下を
 挙げて知らぬ。去れど冷やかに日落ちて、月つきさえ闇やみに隠ひそるる宵よを
 思え。——ふる露のしげきを思え。——薄うすき翼よくのいかばかり薄うすき
 かを思え。——広ひろき野の草の陰かげに、琴ことの爪つめほど小ちいきものさの潜ひそむを

思え。——畳む羽に置く露の重きに過ぎて、夢さえ苦しかるべし。果知らぬ原の底に、あるに甲斐かなき身を縮めて、誘う風にも砕くる危うきを恐るるは淋さびしかろう。エレーンは長くは持たぬ。

エレーンは盾を眺めている。ランスロットの預けた盾を眺め暮している。その盾には丈高き女の前に、一人の騎士が跪ひざまずいて、愛と信とを誓える模様が描かれている。騎士の鎧は銀、女の衣は炎の色に燃えて、地じは黒に近き紺を敷く。赤き女のギニヴィアなりとは憐れなるエレーンの夢にだも知る由がない。

エレーンは盾の女を己れと見立てて、跪ひざままずけるをランスロットと思う折さえある。かくあれと念ずる思いの、いつか心の裏うちを抜け出でて、かくの通りと盾の表にあらわれるのであろう。かく

ありて後と、あらぬ礎いしずえを一度び築ける上には、そら事を重ねて、そのそら事の未来さえも想像せねばやまぬ。

重ね上げたる空想は、また崩れる。兎戯に積む小石の塔を蹴返けかえす時の如くに崩れる。崩れたるあとのわれに歸りて見れば、ランスロットはあらぬ。気を狂いてカメロットの遠きに走れる人の、わが傍そばにあるべき所謂いわれはなし。離るとも、誓ちかいさえ渝かわらずば、千里を繋ぐ牽ひき綱つなもあろう。ランスロットとわれは何を誓える？ エレーンの眼には涙が溢あふれる。

涙の中にまた思い返す。ランスロットこそ誓わざれ。一人誓えるわれの渝るべくもあらず。二人の中に成り立つをのみ誓とはいわじ。われとわが心にちぎるも誓には洩もれず。この誓だに破らず

ばと思ひ詰める。エレーンの頬の色は褪^あせる。

死ぬ事の恐しきにあらず、死したる後にランスロットに逢いがたきを恐るる。去れどこの世にての逢いがたきに比ぶれば、未来に逢うのかえつて易^{やす}きかとも思う。罌粟^{けし}散るを憂^うしとのみ眺むべからず、散ればこそまた咲く夏もあり。エレーンは食を断つた。

衰えは春野焼く火と小さき胸を侵^おかして、愁^{うれい}は衣に堪えぬ玉^{ぎよつ}
骨^{こつ}を寸^{すん}々に削る。今までは長き命とのみ思えり。よしやいつ

までもと貪^{むさぼ}る願はなくとも、死ぬという事は夢にさえ見したためし
あらず、束^{つか}の間^まの春と思ひあたれる今日となりて、つらつら世を
観^{かん}ずれば、日に開^{ひら}く蕾^{つぼみ}の中にも恨^{うらみ}はあり。円^{まる}く照る明月のあすを
と問わば淋しからん。エレーンは死ぬより外の浮世に用なき人で

ある。

今はこれまでの命と思ひ詰めたる時、エレインは父と兄とを枕辺に招きて「わがためにランスロットへの文かき玉われ」という。父は筆と紙を取り出でて、死なんとする人の言の葉を一々に書き付ける。

「天^{あめ}が下^{した}に慕える人は君ひとりなり。君一人のために死ぬるわれを憐れと思え。陽^{かげろう}炎燃ゆる黒髪の、長き乱れの土となるとも、胸に彫るランスロットの名は、星変る後の世までも消えじ。愛の炎に染めたる文字の、土水^{どすい}の因果を受くる理^{ことわり}なしと思えば。睫^{まつげ}に宿る露の珠^{たま}に、写ると見れば砕けたる、君の面影の脆^{もろ}くもあるかな。わが命もしかく脆きを、涙あらば濺^{そそ}げ。基督^{キリスト}も知る、死ぬ

るまで清き乙女なり」
おとめ

書き終りたる文字は怪しげに乱れて定かならず。年寄の手の顫ふるえたるは、老のためおいとも悲のためかなしみとも知れず。

女またいう。「息絶えて、身の暖かなるうち、右の手にこの文ふみを握らせ給え。手も足も冷え尽したる後、ありとある美しき衣きぬにわれを着飾り給え。隙間すきまなく黒き布しき詰めたる小船こふねの中にわれを載せ給え。山に野に白き薔薇ばら、白き百合ゆりを採り尽して舟に投げ入れ給え。——舟は流し給え」

かくしてエレーンは眼を眠る。眠りたる眼は開く期ごなし。父と兄とは唯々いとして遺言ごことの如く、憐れなる少女おとめの亡骸なきがらを舟に運ぶ。古き江さざなみに漣さざなみさえ死して、風吹く事を知らぬ顔に平かである。舟

は今緑り罩こむる陰を離れて中流に漕こぎ出いづる。櫂か操あやつるはただ一人、白き髪ひげの白おきなき翁おきなと見ゆ。ゆるく搔かく水は、物憂あやげに動いて、一櫂こごとに鉛なの如ごとき光りを放つ。舟は波に浮うぶ睡すい蓮れんの睡すれる中に、音もせず乗のり入いりては乗のり越こして行く。萼うた傾なけて舟を通としたるあとには、軽かろく曳ひく波足と共にしばらく揺ゆれて花の姿しずけは常とこの静しずかに帰かへる。押し分けられた葉の再び浮うき上ある表うらには、時ならぬ露つゆが珠たまを走はらす。

舟は杳ようぜん然ぜんとして何処いずくともなく去いる。美うしき亡なきが骸がらと、美うしき衣きぬと、美うしき花はなと、人とも見えぬ一個の翁おきなとを載のせて去いる。翁おきなは物をもいわぬ。ただ静しずかなる波なみの中に長ながき櫂こをくぐらせては、くぐらす。木きに彫うる人ひとを鞭むちうつて起たたしめたるか、櫂こを動うかす腕ほかの外ほか

には活きたる所なきが如くに見ゆる。

と見れば雪よりも白き白鳥が、収めたる翼に、波を裂いて王者の如く悠然と水を練り行く。長き頸の高く伸したるに、気高き姿はあたりを払つて、恐るるものありとしも見えず。うねる流を傍目もふらず、舳に立つて舟を導く。舟はいづくまでもと、鳥の羽に裂けたる波の合わぬ間を随う。兩岸の柳は青い。

シヤロットを過ぐる時、いづくともなく悲しき声が、左の岸より古き水の寂寞を破つて、動かぬ波の上に響く。「うつせみの世を、……うつつ……に住めば……」絶えたる音はあとを引いて、引きたるはまたしばらくに絶えんとす。聞くものは死せるエレーンと、艫に坐る翁のみ。翁は耳さえ借さぬ。ただ長き櫂をく

ぐらせてはくぐらする。思うに聾つんぼなるべし。

空は打ち返したる綿を厚く敷けるが如く重い。流を挟はさむ左右の柳は、一本ごとに緑りをこめて濛もうもう々と烟る。娑婆しやばと冥府めいふの界さかいに立ちて迷える人のあらば、その人の霊を並べたるがこの気色けしきである。画えに似たる少女おとめの、舟に乗りて他界へ行くを、立ちならんで送るのでもあろう。

舟はカメロットの水門に横付けに流れて、はたと留まる。白鳥の影は波に沈んで、岸高く峙そばだてる楼閣の黒く水に映るのが物凄ものすげい。水門は左右に開けて、石階の上にはアーサーとギニヴィアを前に、城中の男女なんによことごとが悉く集まる。

エレーンの屍しかばねすべは凡ての屍のうちにて最も美しい。涼しき顔を、

雲と乱るる黄金こがねの髪うづに埋めて、笑える如く横よこたわる。肉にくに付着する
あらゆる肉の不浄ぬぐを拭い去つて、靈その物の面影こまげを口鼻こうびの間に示
せるは朗かにもまた極めて清い。苦しみも、憂いも、恨みも、憤
りも——世いまに忌いわしきものの痕あとなければ土つちに歸る人とは見えぬ。

王おおいそは嚴おごかなる声こゑにて「何者ぞ」と問う。權けんの手を休めたる老人
は唾おとしの如く口を開かぬ。ギニヴィアはつと石階くだを下りて、乱るる
百合の花の中より、エレーンの右の手に握る文ふみを取り上げて何事
と封を切る。

悲しき声はまた水を渡りて、「……うつくしき……恋、色や……
……うつろう」と細き糸いとふつて波うたせたる時の如くに人々の耳を
貫く。

読み終りたるギニヴィアは、腰をのして舟の中なるエレインの額——透き徹るとおエレインの額かぶに、顫えたる唇をつけつつ「美しくき少女！」という。同時に一滴の熱き涙はエレインの冷たき頬の上うへに落つる。

十三人の騎士は目と目を見合せた。

青空文庫情報

底本：「倫敦塔・幻影の盾 他五篇」岩波文庫、岩波書店

1930（昭和5）年12月20日第1刷発行

1990（平成2）年4月16日第23刷改版発行

1997（平成9）年1月16日第29刷発行

※校正には、1997（平成9）年9月5日発行の第30刷を使用した。

入力：鈴木厚司

校正：藤本篤子

1999年3月6日公開

2004年2月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

薙露行

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>